

一般逆導関数積とゼロ除算

従前の逆導関数積は,

$$\frac{dy}{dx} \cdot \frac{dx}{dy} = 1 \quad (f \neq 0 \wedge f^{-1} \neq 0) \quad (1)$$

で与えられる.

しかし, この定義範囲のままでは, 導関数が 0 のとき取り扱えない. そこで, (1)式を導関数が 0 のときにも適用可能なように拡張することを考える.

定理 次の関係が成り立つ.

$$\frac{dy}{dx} \cdot \frac{dx}{dy} = \left(\frac{dy}{dx}\right)^0 = \begin{cases} 0 & (f = 0) \\ 1 & (f \neq 0) \end{cases} \quad (2)$$

証明

$$y = F \quad (3)$$

とする. すると,

$$\frac{dy}{dx} = f \quad (4)$$

であるから,

$$\frac{dx}{dy} = f^{-1} \quad (5)$$

とおける. ここで, (4)式と(5)式の辺々をそれぞれ乗じると,

$$\frac{dy}{dx} \cdot \frac{dx}{dy} = f \cdot f^{-1} = f^0 = \left(\frac{dy}{dx}\right)^0 = \left(\frac{dy}{dx}\right) \cdot \left(\frac{dy}{dx}\right)^{-1} \quad (6)$$

を得る. つまり,  $f \neq 0$  のとき, (6)式は, 従来の

$$\frac{dy}{dx} \cdot \frac{dx}{dy} = 1 \quad (f \neq 0) \quad (7)$$

となり,  $f=0$  のとき, (7)式は成り立たないといえる. 更には,  $f=0$  のとき,  $0^0=0$  を用いれば,

$$\frac{dy}{dx} \cdot \frac{dx}{dy} = 0 \quad (f=0) \quad (8)$$

であると言える. つまり, (7)式と(8)式を合わせて,

$$\frac{dy}{dx} \cdot \frac{dx}{dy} = \begin{cases} 0 & (f = 0) \\ 1 & (f \neq 0) \end{cases} \quad (9)$$

が成り立つと言える. □